

「賀川豊彦の教育論の背景に関する一考察」



大正10年頃の賀川豊彦

導入

私自身の賀川豊彦に関する関心は、プリンストン神学大学における2011年4月5日の「賀川記念講演」の講師として招かれた時から本格的に始まりました。1812年に創立した米国長老教会の神学大学で、賀川が1916年卒、私の先輩に当たります。おそらく彼はわが母校の歴史において唯一ノーベル平和賞の候補にあげられた（4回も）卒業生ではないかと思われまます。「賀川記念講演」は、2001年から始まって、3人の日本の神学者たち、古屋安雄、小山晃佑、および森本あんりの後に、始めての外国人として私はその重い責任が与えられました。正直のところ、講演当日の一年前ぐらいに呼ばれたとき、恥ずかしくて、当時賀川についてまだ本当に大ざっぱなことしか知らなかったので、一生懸命、勉強しないと無責任になるのではないかと思って、とにかく、その「賀川記念講演」¹の準備のきっかけで賀川への関心を持つよ

うになりました。

賀川豊彦は、どういう点が一番魅力的またユニークであるか聞かれた場合、本人が「私は科学的な神秘主義者だ (I am a scientific mystic)」という自己定義を言い出したところだと思います。それは、いったい何の意味なのか。「科学的な神秘主義者」。それを解くまで少し時間がかかりましたが、「賀川全集」を読めば読むほどに、何となく、だいたいその自己定義で彼が言いたかったことに対して自分なりに言葉が与えられたという感じがします。²

私は、実践神学（キリスト教教育学）の専門でありながらも、賀川の教育論を見ようとしているのは最近のことですが、しかし、最初に言っておきたいことは、彼の教育論にしても、経済論にしても、宗教論にしても、全ては、「あらゆるものを全体から見る姿勢 (Seeing All Things Whole)」という彼の独自の神秘主義的な宇宙論に基づいていることです。「賀川全集」に収集された幅広いジャンルを含む断片的な著作—多くは講演、講義、説教、座談などの秘書による記録—何処を見ても、この「あらゆるものを全体から見る姿勢」が目立っています。一

¹ プリンストン神学大学第4回賀川記念講演（2011年4月5日）トマス・ジョン・ヘイステイングス「イエスの贖罪愛の実践～賀川豊彦の持続的証し～」、（訳：加山久夫）、『雲の柱』第26号 2012年、83-112頁参照。

² 「賀川豊彦-科学的な神秘主義者」『モノ学・感覚価値研究』（京都大学・こころの未来研究センター）、第8号、2014年2月、13-30頁参照。

方、この文献は、体系無しに賀川があちらこちらの学説を自由に出して飛び回っているようで、しかし読む側にしてみれば、多少なりとも傾向が見て取れるかも知れません。というのは、賀川に「方法論」があるとするならば、それは「second level（論理的な知能的思考）」に基づいているというよりも「first level（生命的な直観的思考）」という基調で言い表せるからです。賀川にとって、我々が生きている世界と宇宙は、長い進化史において宇宙意思（＝神）から生じた、「生命」と「意識」を「創発的な軸」（emergent axes）とする、数多くのファセットを持つダイヤモンドのような、動的な「生きているもの」であります。それ故に、賀川は、もし我々がこの「生きているもの」に対して、論理的・理性的説明に終始して、直観を軽視したならば、直ちに全体が見えなくなってしまうだろうと懸念する姿勢を示しています。もしかすると特に 20 世紀の日本で、明治期に輸入してきた欧米型の近代研究大学組織の諸学問分野において、人間知が益々お互いに関係のない畑として細分化されてきた強い傾向の直中で、このような宇宙論を想像し続けたことは、極めて物珍しいのではないかと思います。

さて、最初にアンリ・ベルグソンの 1932 年に出版された『道徳と宗教の二源泉』からの一つの関連した引用を紹介します。

事実、よろこびは、拡散した神秘的直感が世界中に伝播させる、生の単純さのことであろう。よろこびとはまた、拡大された科学的経験のなかで、彼岸の幻視のあとに自動的に続く単純さのことであろう。これほど完全な精神的革新が行われない場合には、さまざまな切りぬけ策に訴え、ますます侵入してくる「統制」に服し、障害物—われわれの本性が文明に対してさし向けている障害物—を一つ一つ避けねばならないだろう。他が、抜本的な方策をとるにせよそうでないにせよ、どうしても決断することが必要だ。人類は自らなしとげた進歩の重荷（おもに）の下で、半ば押し潰され、呻いている。人類は、自分の未来が自分次第だということを十分に知っていない。人類はまず、自分が生き続けようと欲しているか否かを見定めることだ。次に人類が自ら問うべきことは、自分はただ生きることを欲しているのか、それとも、そのほかに、宇宙—神々をつくるための機械である宇宙の一本質的機能が、反抗的なわが地球上でまでも、遂行されるに必要な努力を惜しまないのかどうか、ということである。³

これはベルグソンの 1932 年に出版された『道徳と宗教の二源泉』という本の締めくくりよりの引用です。これは、悲惨な第一次世界大戦を経験してきた世界に対するベルグソンの最後の、いわば遺言予言の言葉です。どうして、これを引用するかというと、ベルグソンは、当時の主流派の実存主義哲学傾向に逆らって、この本の中で、思い切って、「静的宗教（static religion）」が作り出す「閉じられた社会（closed societies）」を批判しながらも、偉大なキリスト教神秘主義者たちが体現する「動的宗教（dynamic religion）」が作り出す「開かれた社会（open societies）」を高く評価するからです。彼の場合、ほとんどキリスト教神秘主義者に限定するのです。少し、インドと、ギリシャ、仏教の神秘主義に触れていますけれども、それは、どちらかという概要だけで、焦点を合わせているのは、彼の文化圏に所属するキリスト教神秘主義者です。

ベルグソンの神秘主義者への高評価は、ただ社会的機能的効果のためではなく

³ アンリ・ベルグソン「道徳と宗教の二源泉」『ベルグソン全集 6 巻』、383-384。

て、神秘主義者たちは「単純な割切れない愛をもって全人類を抱きかかえる」ことによって哲学者たちも深い感化を受けているからだと言えるでしょう。神秘主義者たちは、「神を通して、神の力により、神的な愛を持って全人類を愛する」とベルグソンは言っています。⁴とにかく、現に近代技術が発明した武器を利用する戦争による絶滅に直面する人類に対して、宇宙そのものを「神々をつくるための機械」として把握する神秘主義者の貢献とこれからの役目は、思ったよりも遙かに大きいのではないかとベルグソンはこの遺言で予言したかったと思います。

先ほどの賀川の自己定義である「科学的な神秘主義者」、彼の恍惚体験と日々の瞑想と祈りの修練、また「あらゆるものを全体から見る姿勢」という宇宙論の試み、さらに「部落問題」を中心にして、たしかに彼が当時日本と欧米の知識人階級で流行っていた社会的進化論と関連した「人種起源説」と「優性論」と偏見と錯誤から解放されていなかった事実を批判すべき点ですが、14年間余りの神戸新川というスラム街での生活から創発された幅広い領域における社会事業の具体的な貢献（宗教、教育、組合経済、救援活動、医療、農業、平和、人権、政治など）を思い返すと、やはり賀川豊彦は、日本の近代史が作り出した偉大なるキリスト教の科学的な神秘主義者であると考えられます。やはり、キリストの「贖罪愛」とそれに伴う「連帯責任感」を具体化しようとする「神を通して、神の力により、神的な愛を持って全人類を愛」しようとする賀川は、その脱線と失敗を忘れずに、中江藤樹（1608-1648年）や二宮尊徳（1787-1856年）のような「動的な聖人（active saint）」を志した人だと認めざるを得ません。

もちろん賀川は、日本生まれ日本育ちですが、日本という枠を越える器の大きさの持主でもありました。新渡戸稲造の賀川についての詩「永遠の青年」は、その要素をはっきり掴んでいます。

「永遠の青年」
「大きかったね
その輪郭は—
すっきりしてゐたね
その肌合は
武士道に
世界魂を注入した
その気魂は
日本の島に容れるのには
少し大き過ぎたね
年と共に
若くなる
あの気持ちよい



⁴ 同上、282。

霊魂-

どこから あゝした

若々さが湧くだらうかと

いつも感心させられた

永遠の青年！」⁵

賀川は単なる「国際人」ではなくて、武士道という「和魂」の上に「世界魂」が加えられた人だ、と新渡戸は的確に歌っています。この矛盾に見える二重の主体性を丁寧に説明するために別な講義をする必要があるが、とにかく、「永遠の青年」は、どちらかという複雑な表現としてそのまま受け止めましょう。というのは、一方、若くて、未熟のまま大人になろうとしないというニュアンスがあれば、他方、年をとっても生き生きしているという意味合いも含まれます。新渡戸は、「どこからあゝした若々さが湧くだらうか」という謎を後世に残してくれた。

日本の社会でこだわりの多い「所属問題」から考えても、賀川豊彦は一筋縄にはいかない。彼は原則として既成プロテスタント長老教会であった日本基督教会（戦後日本基督教団）の牧師と伝道者として留まっていたが、スラム街での地味な救霊救援活動の出発から全く新しい精神的な社会運動を作り出そうとしました。賀川は、日本基督教会に「所属」するよりも、事実上何も無いところから創造された「救霊団」、「イエスの友会」、「雲柱社」など、別な新しい諸グループに所属しました。没後 54 年たっても尚、日本のプロテスタント教会の中では、ことに賀川の科学的な神秘主義と宇宙論という側面をどう捉え評価すべきかは非常に複雑な問題であるわけです。従って、順序として世界近代史、日本近代史、さらにプロテスタント教会を限定せず、世界キリスト教史と日本のキリスト教史という枠において賀川を捉え評価すべきではないか思われます。やはり、新渡戸が言っている通り「日本の島に容れるのには、少し大き過ぎたね」ということになります。

賀川教育論の思想背景

『賀川全集』の第6巻には、次の宗教教育に関する書物があります。

「日曜学校教授法」（翻訳、1915年）

「イエス伝の教え方」（1920年）

「魂の彫刻」（1926年）

「宗教教育の本質」（1929年）

「宗教教育入門」（1930年）

「自然と性格」、（1933年）

⁵ 『新渡戸稲造全集別巻』教文館、1987年。新渡戸の引用は、濱田陽、「賀川豊彦と海洋文明—死線と大震災を越えて—」宗教と社会貢献、1(1)、2011より。

「幼児自然教案」 (1933 年)

賀川の教育論は、一言でいえば「大正生命主義 (vitalism)」と合衆国の「ボストン人格主義 (Boston Personalism)」の統合であります。例えば 1922 年の「生命宗教と生命芸術」を見ると、先ほどのベルグソンの初期著作 *L'Évolution Créatrice* (1907) と *Matière et Mémoire* (1908) に現れる生命主義の影響は強いと分かります。しかし、日本ではあまり研究されていないですが、賀川の考えは、米国ボストン大学の神学部で教えていたバウン (Borden Parker Bowne) の著作からの感化の方がベルグソンなどの生命主義よりも強いかもしれません。1955 年の短い自伝記「わが村を去る」において、本人はその影響についてこう言います。

バウンの人格主義の宗教哲学は、明治学院の図書館のたまものであるとわたしは感謝した。十七才のころバウンの宗教哲学を読んだから、今日まで、あまり思想的に動揺せずに、人格主義の宗教哲学の中心に進んでこられたのは、若い時によい書物に出会したためだとわたしは思っている。⁶

バウンは唯物論と観念論の対立を人格主義という哲学において、一種の中庸を開拓していったアメリカ人の哲学者です。バウン自身はドイツのゲッティンゲン大学の Rudolf Hermann Lotze の下で勉強して、Lotze 論の解釈をアメリカで紹介した人です。これは、アメリカ型の自由主義神学論の源流となります。賀川自身は、若いときからの直感で、19 世紀の唯物論と観念論の極端な対立は、人類に不幸をつくり出すことを懸念しました。

しかしバウンと賀川のも一つの大きな共通点は、同じキリスト教信仰であって、バウンの場合は、18 世紀の英国人伝道者、社会改革者であるジョン・ウェスレーが始めたメソジスト教会の者で、賀川は長老教会に所属しながらも、ウェスレーが起こした運動を自分の日本での運動の一つのモデルにしました。⁷

つまり、賀川の原点である精神運動と社会運動の表裏一体論は、この人格主義に根拠があります。面白い史実として、米国の黒人運動家である M. L. キング牧師は、ボストン大学の神学部でこのバウンの後任である Edgar Sheffield Brightmann の下で同じバウンの人格主義を勉強し、それは自分の基本的なスタンスであると告白します。

教育実践と宇宙観

教育は、精神運動と社会運動を裏付ける大事な活動の一つであるという確信をもって、スラム街での活動の最初期から、賀川自身と妻ハルは、教育にかなりの力を注ぎましたが、週一回限りの日曜学校が全然もの足りないと感じました。1931 年に賀川が牧会をしていた東京の松沢教会の隣で、松沢幼稚園を創立したときに、ようやく幼児教育に対して関心が高まってきました。

⁶ 賀川豊彦、「わが村を去る」『若き日の肖像』(東京：毎日新聞社、1955 年)、105 頁。または雨宮栄一、『青春の賀川豊彦』(東京：信教出版社、2003 年)、200 頁。

⁷ 賀川は「ジョン・ウェスレーの信仰日誌」を和訳した(昭和 4 年、教文官)。

賀川は、当時の宗教心理学説が主張していたように、大人は既に人格を形成しているのですから、神の愛に基づく人格主義的生命主義的宗教教育を本気でやるならば、幼児から始めないと意味はないのだと思っていました。賀川は、伝道、労働運動、農業運動、組合運動に従事してきたが、子どもたちの教育への関心が非常に強くなりました。

賀川の人格主義的生命主義的宗教教育論は、宗教、芸術、および科学を統合する形で、六つの教育活動を時間的な傾向に区分します。

現在に関して：自然、芸術、瞑想と祈り

過去に関して：歴史

未来に関して：労作、博愛

そして、この諸活動の全ては、「人格的接触」において行われるはずだと言います。

例えば、ここで言われている「自然」の教育活動は、決して机の上の活動ではなくて、子どもたちを森の中、丘の上、川のそば、畑など、キャンプの時深夜の野原などに連れて行って、生きものの世界を生きたままに見る、聞く、触る、臭う、味わう、つまり身体的に自然を体験するという意味です。大自然、大宇宙、さらに神への尊敬と驚異の念を具体的に身につけるため、自然界の鉱物、植物、動物、天体、宇宙にある全てのものまで五官を通して体験させられます。身体と意識が与えられた人格者である子どもたちには、なるべく直接に大自然と宇宙の「一体性」を身体的に感じられる機会を与えます。

宇宙観、動的宗教と神秘主義

先ほどのベルグソンとの関連では、賀川は静的宗教指導者 (static religious leader) ではなくて、動的宗教指導者 (active religious leader) です。賀川は、いろいろな社会事業を発足したことから、宗教的な活動家 religious activist として見られる傾向にあります。しかし、本人の真の狙いは、どちらかというところ、先ほどに言ったような「動的な聖人」になりたがっているということです。結局、「宗教的な活動家」と「動的な聖人」とは、言葉上では似ていますが、順序と強調点において逆な意味を持ちます。つまり、賀川の志は、唯単に「活動家」ではなくて、イエス・キリストに倣って「贖罪愛」を実践する「動的な聖人」なのです。

1949年の「東洋思想の再吟味」において、賀川は、中国明代の儒者である王陽明の教えを日本に紹介した中江藤樹を高く評価し、深い敬意を言います。姉崎正治の説に同意して、藤樹の一神教的思想が当時迫害中にあった切支丹思想から影響されたということを主張します。

藤樹に於いて陽明学派がキリスト教と一緒にあった。が、陽明学といっても、藤樹のそれは支那の陽明学ではなく、日本のキリスト教的陽明学であった。これが熊沢蕃山となり、大塩平八郎となり、西郷隆盛となり、吉田松陰となったのである。

中江藤樹はかやうに非常に大きな感化を残した人で、日本に於ける動的な聖人の道の開

拓者である。日本に於ける陽明学派は中江藤樹からはじまっている。日本のキリスト教は迫害を受けたが、中江藤樹を通して神の摂理が働いた。聖人の道はキリスト教によって中江藤樹のうちに伝わった。⁸

ベルグソンの理解によると、静的宗教は、どちらかというとも既成社会制度を守るための宗教であって、動的宗教とは、受け継いだ人知を越えて、人々を新しい境界線と水平線へと導いていくものです。動的宗教は、静的宗教の「内を守る」精神と違って、「宇宙」、「宇宙意志」、「神」という究極的水平線を意識しながらも、絶えず外へと動いていく。ベルグソンによると、「偉大なるキリスト教の神秘主義者」は、この動的宗教を代表する。ベルグソンは、このような人たちについて次のことを言う。

かれ（偉大なキリスト教神秘家）を焼尽つくす愛は、もはや単に、神に対する一人の人間の愛ではなく、すべての人間に対する神の愛だからである。かれは、神を通して、神によって、神的愛で全人類を愛する。⁹

英国の作家ジョージ・オーウェルは、マハトマ・ガンジーに関する文書の中で、こう語っています。

聖人は、無罪であると証明されるまでに、必ず有罪であると判断されなければならないが、しかし適用されるべき基準が当然それぞれのケースに同じではない。

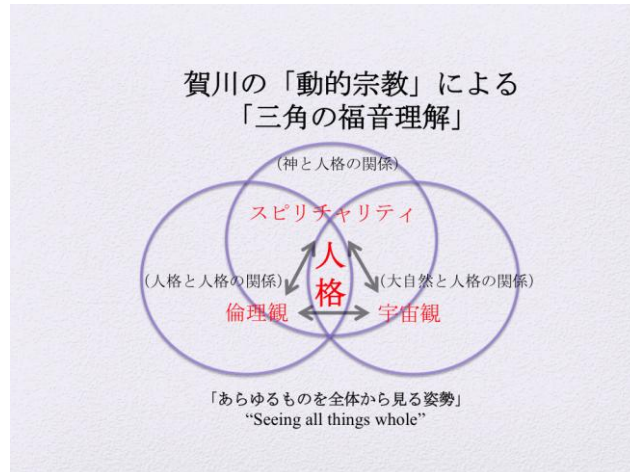
Saints should always be judged guilty until they are proved innocent, but the tests that have to be applied to them are not, of course, the same in all cases.¹⁰

賀川は、無論完全な人ではないのです。しかし、賀川自身の志は、間違えなく「動的な聖人」になろうとしていた。「聖人」であったかどうか、勿論私は結論を出せませんが、全体像を見て、例えば日本の社会、また世界に対する貢献を含めると、賀川は、ベルグソンが言っている「偉大なるキリスト教の神秘主義者」の一人であると、私は思います。

⁸ 賀川豊彦、「東洋思想の再吟味」、『賀川豊彦全集』第13巻、134頁。

⁹ ベルグソン、282。

¹⁰ George Orwell, “Reflections on Gandhi,” *Partisan Review*, January 1949.



この図に見えるように、賀川には、「あらゆるものを全体から見る」姿勢が身につけられた。賀川の考えは、一種の「キリスト教の一元論（Christian Monism）」を言い表す。普通感覚では、「あの世」と「この世」が無関係であれば、しかし神の人格啓示としてイエス・キリストに集中する「科学的な神秘主義者」である賀川の中で、そのような「超越」対「内在」の分離は、乗り越えられたと信じたのです。

これは東洋思想と関係があるかどうか分かりませんが、賀川のキリスト教の受容の仕方は、このような強い一元論的な要素を持つ。「神と人格」（スピリチュアリティ）、「大自然と人格」（宇宙観）、また「人格と人格」（倫理観）の諸関係は、ばらばらではなくて、互いに貫通する相互補完性をもつ関係として、また「人格」という座標軸から捉えられるはずなのだと言った賀川は考えていた。この人格中心的な立場は、当然賀川教育論と実践にも現れてくる。

現代的な宇宙論の必要性

賀川が、当時の日本の自然科学者たちに訴えたことは、「なぜ宇宙論を出せないのか」ということです。宇宙論に触れない科学者に対していつも厳しい批判を投げかけます。なぜ、そういうことを言っているのかというと、当時多くの欧米の自然科学者たちは、宇宙論に相当な力を注いでいたからです。¹¹賀川は、よく科学書を読んでその国際的な傾向を把握した。みんなは必ずしも同じキリスト教徒ではありませんが、彼らに対して、大胆に宇宙論を探究すべきであると主張します。賀川は、生命には宇宙的な神秘が潜められることを確信しましたし、また生きることが驚くこと、意義あること、さらに目的あることという精神的な発見は、子どもたちと青年たちにとって死活問題であると賀川は自分の人生経験から知っていたので、宇宙論の探究に対して諦めていないのです。

¹¹ 例えば、Lecomte du Noüy, *Human Destiny*, Gustaf Strömberg, *The Soul of the Universe*, Fred Hoyle, *The Nature of the Universe*, George Ganow, *The Creation of the Universe* など。

一つの具体例として、満州事変（1931）および日本の国際連盟脱退（1933）後の嵐の只中で、賀川は中村獅雄と共に、Sir James Jeans *The New Background of Science* (1933)の翻訳作業を進めていました。賀川はその序文の中で、ドブログリー、シュレディンガー、エディングトン、ハイゼンベルク、ミリカン、コンプトン、アインシュタインらに代表される新しい物理学に大きな刺激を受けたことを述べています。彼はそれを「19世紀の物質主義から唯心論への転向の過程」¹²と呼び、ジーンズの著書を Friedrich Albert Lange, *Geschichte des Materialismus und Kritik seiner Bedeutung in der Gegenwart*¹³ (F.A. ランゲ『唯物論史』賀川豊彦訳、春秋社、1929年)—賀川は他の訳者ととともに1929年に訳していた—の相応しい継承者であると考えました。

ランゲが、新カント派の立場から論理的に唯物論に反対したのに対して、新しい物理学（ジーンズによって展開されている）が論理の立場を離れ、物理学そのものの内容から唯心論に転向せんとするその進歩発達を、我々は無視することが出来ない。¹⁴

ジーンズの著書への序文における賀川の結びの言葉は生涯にわたる彼の科学とう中論への関心の背後にある精神的動機に言及しています——

私は科学それ自身を、決して排除しなかった。それとは反対に、科学それ自身が靈魂の窓であることを主張してきた。そして今新しい科学が、さうした立場をとらうとしていることを私は嬉しく思っている。私の希望する処は、日本の自然科学者が、さらに深く実験室を通して、宇宙の実在の本質に切り込まれることである。さうすることによって、物的宇宙が結局、宇宙精神の表現であることを彼等は発見するであらう。その日を待ちつつ私は、日本の読書界にこの書を送り出す。¹⁵

賀川は古臭い理念であるとする科学主義 (scientism) に対して批判的であるが、他方、これらの言葉は、クールな科学的研究は結局のところ、広大な宇宙における生命の目的に関するよりニュアンスのある、美的な、かつ開かれた解釈に寄与するであろうという、彼の強くかつ恐らく幾分ナイーブな信仰を明らかにしています。

敬虔（スピリチュアリティ）と教育

「宗教教育の本質」の中で、賀川は、「敬虔」（スピリチュアリティ）について次の定義を提供しています。

敬虔は宗教の本体である。その敬虔を過去現在未来に通じて理解する為に、我々は、今迄に考えた六種類の方法、（自然、芸術、瞑想と祈り、歴史、労作、博愛）を用いるまでのことであつた。敬虔は、自己を単位としない生活そのものであり、絶対より有限の世界を見直す気持ちである。¹⁶

この「自己を単位としない生活」と「絶対より有限の世界を見直す気持ち」とい

¹² J. H. ジーンズ 『科学の新背景』賀川豊彦・中村獅雄訳（警醒社、1934年）序文。

¹³ 英訳 F.A. Lange, *History of Materialism and Criticism of its Present Importance* (London: Trubner, 1881).

¹⁴ ジーンズ『科学の新背景』序文。

¹⁵ ジーンズ『科学の新背景』序文。

¹⁶ 賀川豊彦、「宗教教育の本質」『賀川全集』第6巻、295頁。

う理解は、無論キリスト教に基づいている。例えば、回心前に熱心なユダヤ教徒であった使徒パウロは、ガラテヤの信徒への手紙2章の19-20節では、自己を突破するキリスト信仰についてこう語っています。

わたしは神に対して生きるために、律法に対しては律法によって死んだのです。わたしは、キリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰¹⁷によるものです。

さらに、同じパウロは、第一コリントの信徒への手紙2章14-16節で、「キリストの思い」 *νοῦν Χριστοῦ* を抱く「霊の人」についてこう言います。

自然の人は神の霊に属する事柄を受け入れません。その人にとって、それは愚かなことであり、理解できないのです。霊によって初めて判断できるからです。霊の人は一切を判断しますが、その人自身はだれからも判断されたりしません。「だれが主の思いを知り、主を教えるというのか。」¹⁸しかし、わたしたちはキリストの思いを抱いています。

賀川は、この「自己を単位としない生活」と「絶対より有限の世界を見直す気持ち」を真剣に受け止めました。例えば、「イエス・キリストはどういう人だったのでしょうか」と聞かれた場合、賀川は、使徒パウロのように、「私に倣いなさい」と答えたようです。¹⁹賀川は、概念ではなくて、生き方としてこの *participatio Christi* (キリスト参与) と *imitatio Christi* (キリスト模倣) をとらえました。賀川の「敬虔」(スピリチュアリティ)の理解の背景には、新約聖書の教えとともに、先ほどの儒教的な「動的な聖人」の志、ひょっとして仏教の「無我」(パーリ語の *anattā*、サンスクリットの *anātman*) の影響なども当然あるでしょう。「あらゆるものを全体から見」ようとする賀川は、静寂主義 (quietism) と密教を避けて、絶えず、神—大自然—社会、つまり宇宙の全てを把握する人格的「敬虔」(スピリチュアリティ)を目指しました。

賀川の敬虔(スピリチュアリティ)の「教育の対象」を考える時、「人格」という概念を見なければなりません。大正13年の「愛の科学」は、賀川の人格主義と進化論の統合論を言い表します。

進化の法則は善の所在地としての『我』のみに発見せられ、『我』は進化の法則と連絡を取って、始めてその宇宙との連絡が理解出来るのである。²⁰

彼がここに考えている「我」は、決して近代思想に現れた「自律した個人 (autonomous individual)」ではなくて、神、大自然、と他の人との関係的な人格全体、つまり身、心、知、魂を包括します。言わば、この「人格」は、神、大自然、と他の人との関係に溶け込み、「我」を無くして、「無我」の体験をし

¹⁷ 「神の子の信仰」という訳も可能です。

¹⁸ 旧約聖書イザヤ書40章13節の引用：「主の霊を測りうる者があるか。主の企てを知らされる者があるか。」

¹⁹ 「わたしに倣う者になりなさい」と「わたしがキリストに倣う者であるように、あなたがたもこのわたしに倣う者となりなさい。(第一コリントの信徒への手紙4章16節、11章1節)。

²⁰ 賀川豊彦、「愛の科学」『賀川全集』7巻、209頁。

ます。大正 15 年の「暗中隻語」の中で、「真理としての人格」という一段落があります。

真理は人間の為である。それは充分人間的であって差支へない。非人間的真理と見えるものもそれが人間の所産である以上、人間性の刻印を持って居る。真理は結局人間性を脱し得るものではない。非人間的法則を以って、宗教の基礎にしようとして、努力した仏教が、最も人間的な如阿弥陀を案出したことに依っても、この辺の消息が良く判る。

否、宇宙に存在する唯一の真理は、人間性そのものなのだ。即ち普通、人格と呼ばれて来て居るものは、宇宙の真理の焦点であってそれに依ってのみ、宇宙が認識せられ、それのみに依って、宇宙の实在が实在そのものとして直観されるのだ。それであるから、真理とは人格であると云っても少しも差支へない。凡ての真理は人格に導き、そして人格は真理の終点である。否真理そのものである。²¹

「敬虔」（スピリチュアリティ）の「教育の目的」は、「第三の曙への準備」であると賀川は、昭和 4 年の「宗教教育の本質」で言っています。

敬虔の教育は、第三の曙に対する準備の教育でなければならない。その為に私は、宗教教育というものを敢て狭く区切らないで、全宇宙に拡がる生命の可能性の感得に努力してきた。自然を通して宇宙進化と生命進化の方向を知り、芸術を通して、心理的可能性を納得し、瞑想を通して良心の可能性を学び、労働を通して人間努力の可能性を、愛を通して人間建築の可能性を、そして宗教歴史を通して宇宙意志の可能性を観測してきた。敬虔の肝要はこれらの可能性に更に新しき可能性を加えることになる。即ち、人間が宇宙意志に同化し得るの可能性である。²²

賀川は、フランスの古生物学者のテイヤール・ド・シャルダンと同じく、近代科学、特にダーウィンの進化論の精神的、また宗教的な意義について瞑想して来ました。先の引用を見ると、その進化論に対する瞑想は、広定義を持つ敬虔教育の実践までにも応用しようとするのが分かります。「自然」は科学（もの）、「芸術」は心理（こころ）、「瞑想」は良心（倫理）、「労働」は努力（身体）、「宗教歴史」は宇宙意志（神）に気づくことにより、究極的に「宇宙意志に同化し得る」ことを目指す。この引用には、はっきり賀川によるスピリチュアリティ、宇宙観と倫理観の相補性を見ることができます。

結局、「第三の曙」とは、「生命」に目覚める体験であって、しかしこの「生命」は、ベルグソンの生命論に影響された賀川の著作によく出てくる「譬喩」であって、決して生物学的な意味のみを言い表すのではなくて、「宇宙意志」、「宇宙生命」、「神の力」、「神」ご自身という哲学的、宗教的な实在を包括する「宗教美的同義語(religio-aesthetic synonym)」です。大正 13 年の「イエスの内部生活」において、賀川は何故「譬喩」を用いるかということの説明をしています。

イエスの宗教は、体験の宗教である。演繹でもなく、帰納でもなく、直観に依ってのみ

²¹ 賀川豊彦、「暗中隻語」『賀川全集』22 巻、72 頁。

²² 賀川豊彦、「宗教教育の本質」『賀川全集』第 6 巻、296 頁。同じ本において、「敬虔による宗教教育」という題の元に次の 7 つの項目が並べています。（1）神聖への教育、（2）宇宙意志への同化、（3）信仰の教育、（4）救に就いての教育、（5）宇宙愛に就いての教育、（6）拝むことの教育、（7）環境と敬虔の教育。

得るものである。従って之を説明するに当たっても、譬喩を用ひる事が、他の論理を使用するよりも優っている。²³

賀川は、キリスト教以外の宗教に対する開かれている精神の持ち主です。普通、日本のプロテスタント教会は排他的、つまり「これじゃないと駄目だ」というようなイメージが一般社会において強いようです。しかし賀川は、大衆が信仰していた宗教に関して、深い理解と柔軟性を言い表します。大衆に向かって知らないキリスト教用語を紹介するよりも、適当な仏教用語があれば、仏教用語を選択します。例えば、普通「Christ's incarnation」を「キリストの受肉」と訳して、しかし賀川は、「受肉」を避けて、「化身」という仏語を使います。つまり、絶えず日本の精神遺産、精神文化がつくり出してきた「宗教性」（反キリスト教の歴史的傾向を含めて）を意識する伝道者です。福音を語る時、適当な共通用語がない場合、「宇宙意思」のような広い解釈の可能性のある哲学用語を選択するのです。

彼は主に社会活動家として知られていますが、しかし賀川の「本職」は、間違えなく日本のキリスト教伝道であった故に、聴く相手がほとんどキリスト教を知らない、あるいはキリスト教に閉じている大衆です。従って、なるべく日本人誰でも理解出来る言葉を用いて、自分なりの「贖罪愛」と「連帯責任の意識」の福音を語りました。賀川は青年期にはショーペンハウアーの意志論に憧れて、多くの場合わざわざ「神」を言わずに、「宇宙意志」を用いました。しかし、賀川は、言葉を語る伝道者だけではなくて、近代日本の「動的な聖人」を志しながら、14年間神戸新川というスラム街での生活と働きを通して、慎ましい生活を送ろうとした人でもあります。賀川の小説「死線を越えて」という大正期のベストセラーがなければ、誰にも注目されていなかった人物になったかも知れません。

賀川は、キリストの「贖罪愛」によって、ベルグソンが言う宇宙の「本質的機能」に対して目が開かれて、「動的な聖人」を志して、伝道、教育と多面的な社会改造活動を通して、現代人のこころの衷に「生命」への憧れと驚異の念を引き起こそうと努力したのです。

日本国際基督教大学財団主任研究員・教育学・賀川豊彦研究
トマス・ジョン・ヘイスティングス

²³ 賀川豊彦、「イエスの内部生活」『賀川全集』第1巻、339頁。